学生の学びをより深めるための保育実践の質向上を目指して　第２報
――学生と子育て支援広場との協同による「庭プロジェクト」の取り組み――

奥　田　美由紀

Quality Improvement of Childcare Practice to Deepen Student Learning（Vol.2）
――“Garden Project,” a collaborative effort between students and a childcare support plaza――

Miyuki Okuda

Abstract

In the previous paper（Okuda and Hasegawa, 2017）several issues concerning the university's childcare support plaza were raised. Suggestions as to how to improve the quality of nurturing for parents and children were also given. These ideas examined what kind of environment would be desired to deepen the learning of the students and to increase their practical skills as childcare professionals.

This report concerns the “Garden Project,” a collaborative effort between students and a childcare support plaza for local parents and children over the past three years.

Key words：Natural experience, Project, Student growth, Childcare support,

１．前稿の概要

前稿（奥田、長谷川、2017）では、2004年から2016年までの本学の子育て支援広場「親と子のひろば」の移り変わりを概観し、現状の課題を見出した[1)]。今後の具体的な方向性を明らかにすることを主な目的として他大学が運営する２か所のナースリーを視察し、2017年度からの取り組みに生かすことを試み、その中で「親と子のひろば」における保育理念と保育方針を掲げ共有した。

また、０～２歳までの子どもにとっての豊かな環境、子育て中の保護者にとっての豊かな環境、更に、将来保育者になる学生にとって豊かな学びが実現出来る環境としてそれぞれ目標とする具体的なポイントを５つあげ、今後の改善点を明らかにした。

２．本研究の目的と方法

前稿の改善点を念頭に置き、本稿では2018年度から2020年度までの３年間の取り組みについて報告する。その中から特に「庭プロジェクト」の取り組みにおいては、これまで庭がなかった子育て支援広場に庭を作ることを提案し実践した有志学生との協同の活動について報告する。そして、庭ができるまでの過程において、あるいは庭ができたことで、子どもや保護者、学生にとって、どのような学びの効果があったのかを明らかにしていくことを目的とする。

研究の方法として､｢庭プロジェクト｣を立ち上げ実践した経緯を示し､かかわった学生(卒業生を含む)へのアンケート調査の結果から、保育者養成における本プロジェクトの意義を考察する。また庭ができたことでの子どもの変化や保護者への影響などを事例や保護者アンケートをもとに考察する。

３．2018年度から2020年度までの３年間の取り組み

「親と子のひろば」をより豊かな環境にするための具体的な改善点を中心に、2018年度から2020年度までの３年間の取り組みについて報告する。その中で⑺庭づくりにおける「庭プロジェクト」の取り組みについて具体的に報告し考察してく。

⑴　オーダーメイドの木製の棚の設置（写真１・２）
⑵　木製・布製の遊具の充実
⑶　わらべうた遊びの定着
⑷　暖簾の設置（写真３）
⑸　「ととけっこうのおはなし会」（全７回）の実施（写真４）
⑹　食材にこだわったクッキング活動（米味噌作り他）（写真５・６）

写真１　木製棚（遊びとして活用）

写真２　木製棚（ベンチとして活用）

写真３　入口の暖簾

写真４　ととけっこうのおはなし会

写真５　味噌作り

写真６　会津塗りの椀で味噌汁を味わう

⑺　庭づくり（「庭プロジェクト」の取り組み）

１）「庭プロジェクト」の発足

東日本大震災から10年が経過し、放射線量の測定を元に安全性が確認され、保護者の抵抗感も薄れてきた今、「親と子のひろば」に自然に触れる環境を整備したいと考えた。そこで、2018年12月、こども保育コース全学生にどのような庭があったら良いと思うか、庭のデザインを募集した。この時点では実現できるか分からなかったが、この庭を造る過程にこそ大きな学びがあると信じ、実現を目指そうという目標を掲げてメンバーを募った。筆者の呼びかけに集まった学生は11名だった。そこで、先ずは全学生から募集した理想とする庭のデザイン案を見ながら自由に語り合った。

２）庭の構想と意図

そこで、有志学生と有志教員が、子ども（保護者）が自然と触れ合い豊かな経験ができる庭について構想し、次のように提案した。庭で遊ぶ子どもは、０～２歳児を対象とした。また、保護者や学生がこの庭で過ごす意味も考えた[2）3）4）5）]。

＜砂場＞

砂遊びは、子どもの全身運動、手指の動き、創造性、社会性、挑戦意欲など、多様な発達を引き出す。また、保護者は子どもと一緒に遊びながら、自分自身の解放感も味わえる。学生は、砂遊びの意義を体験的に学びながら、援助の方法や環境整備、管理の重要性を再確認し、子どもの姿から多くを学び取ることが期待できた。

砂場は庭の中央に位置し、複数の親子が同時に遊べる大きさを考慮し直径3.5メートルの円形を提案した。砂場の囲いは木製にし、子どもが万が一転んでも軽度の怪我ですむように配慮した。また、砂は、同志社女子大学で砂遊びの研究をしている笠間浩幸氏に相談し、NPO法人福島サンドストーリーの協力を得て、棚倉町の砂の搬入を計画した（写真７）。

＜築山＞

高さ50㎝程度の緩やかな傾斜の山を登る体験、頂上に達した達成感、傾斜を下る経験は、１～２歳児にとっては大きなチャレンジとなる。大型固定遊具は置かず、地形を生かして全身でバランスを取りながら全身運動ができる環境を考えた。

＜畑＞

作物の生長の様子を見て、触れて、収穫体験が出来る環境を考えた。対象児は低年齢のため、花を摘む、（まだ収穫には早い）実を摘む行動が予想され、それは自然な発達と考えた。そのため、この畑は、学生が保育現場において栽培活動をどのように展開し、子どものどのような体験を重視するかという学びが中心になる可能性がある。また、収穫の喜びや採りたての美味しさを味わい、収穫物を使ってのクッキングでは食育活動の展開が期待できた。

＜樹木や草花＞

実のなる木の苗木を植えようと計画した。学生は、季節ごとに子どもたちに触れて味わってもらいたいことを挙げ、草花を使った遊びや果実や木の実を拾う遊びなども想定し、植栽を選んだ。庭に高低差をつけ、苗木が生長したら木陰を作り、鳥や虫が集まる小さな森のようになっていくことを想定した。

＜ビオトープ＞

水辺を作り、様々な生き物を観察できる環境を検討した。しかし、常に大人の目がある管理されている場所ではないため、いつ誰が入って何が起きるか分からない。乳幼児は、10㎝の水でも事故が起きることを踏まえ、誰もが自由に入れる庭にあっても安全であることが重要な条件であることを前提に慎重に検討した。初年度、ビオトープを特別研究のテーマにしている学生がいたため、その学生を中心に調査研究を進めた。

それぞれの場所を具体的に考えながら、庭全体のコンセプトとして、①多くの種類の植栽に触れられる庭　②五感で感じる庭　③高低差があり走り回れる庭　④隠れたりできる場所もある庭　⑤生き物が集まる庭が、浮かび上がってきた（写真８）。

写真７　直径3.5mの砂場

写真８　庭の全体

３）庭づくりの経過

「親と子のひろば」と協同で、次のような活動を展開した。

2018年12月　庭プロジェクト発足（有志メンバー13名）
　　庭の広さやレイアウトを考える（写真９）

2019年５月　庭づくり着工（囲い・素地・砂場・築山・畑）業者に依頼（写真10）

2019年７月　庭仕事（有志メンバー21名）
　　苗（赤シソ･ラベンダー･ミント･ローズマリー･リュウノヒゲ）樹（ブルーベリー２本･金木犀）種（向日葵･コスモス）を植える（写真11･12）、枯れた木を撤去する（写真13）、ビオトープを作る（メダカ）

2019年11月　庭仕事（有志メンバー21名）
　　畑仕事（エンドウ豆・白菜・かぶ）（写真14）、どんぐりの発芽を促す（写真15）、雨の日にできる川づくり（水捌けを良くする）、春の庭のデザイン（チューリップの球根を植える）、メダカを室内の水槽に移す、庭の名前を募集する、庭にメンバーの名前を残す取り組み

2020年５月　コロナ禍のためリモートまたは庭ミーティング（有志メンバー７名）
　　今年度の庭づくりの構想を話し合う、同好会の立ち上げ（写真16）

2020年６月　業者による工事
　　（枯れたツゲの木の撤去・低い土地への土の搬入・木を植える場所の掘削）

2020年７月　庭仕事（有志メンバー10名）
　　畑（エンドウ豆・ジャガイモ）、メダカを庭に移す
　　砂場の日除け対策（緑のカーテン・パラソル・タープ）（写真17）

2020年８月　庭仕事（有志メンバー10名）
　　木を植える（コナラ・金木犀２本目・オリーブ）、モッコウバラの秘密基地（写真18）、畑（ミニトマト・ナス・カブ・セロリ）（写真19）、クワガタを育てる、赤紫蘇ジュースづくり、ベンチの塗装（写真20）

2020年10月　卒業生を招いて『Garden Party』開催（写真21）

2020年11月　冬の庭仕事（有志メンバー10名）
　　野菜の収穫（大根・人参・かぶ）（写真22）、クリスマスの植栽・春の庭をデザイン（チューリップの球根・種まき）、サークルの用品棚の設置、メダカを室内に移す

2020年12月　同好会が、サークルになる

写真９　庭の広さやレイアウトを考える

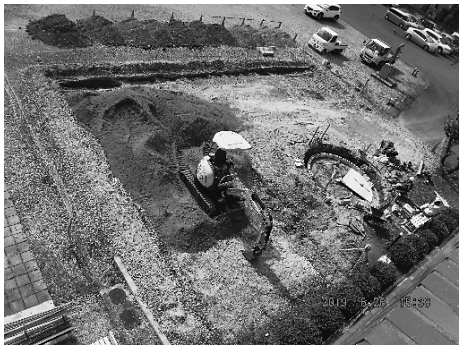

写真10　業者による工事着工

写真11　赤紫蘇を植える

写真12　ブルーベリーを植える

写真13　枯れた木を撤去する

写真14　畑に種をまく

写真15　どんぐりの発芽を待つ

写真16　コロナ禍でのミーティング

写真17　日除けのタープを張る

写真18　モッコウバラの隠れ家を作る

写真19　ナスの苗を植える

写真20　ベンチに塗装する

写真21　ガーデンパーティをする

写真22　人参と大根とカブを収穫する

４）庭プロジェクトの活動における事例検討

庭プロジェクトメンバーは、庭を作ったことにより様々な自然現象に出合い、様々な人々の考えに出会い、突然起きるこれらの出来事を通して多くの感情体験をしてきた。その度に一人一人が真剣に考え、ミーティングを開いて話し合った。その事例を簡単に説明する。

事例１　雑草をどう考えるか

子どもの視点で考えると多くの草花遊びが展開できるが、その視点を持たない場合、雑草をそのまま放置しているように捉えるのは当然のことである。子どもの自然体験の重要性を知り、雑草の意味を考えられるにはどのようにしたらよいのか議論した。

事例２　水溜まりをどう考えるか

雨の季節には水が溜まったままで水捌けが悪く、樹木や草花の苗がしばらく水に浸かったままで育ちが悪くなってきた。そこで「雨の日だけ流れる小さな川」を作ることにした（写真23）。また、庭の南側の土手に塩ビ管を埋め、その前には砂利を敷いて自然に濾過できる構造を作り水が集まるように検討した（写真24）。

写真23　雨の日だけ流れる小さな川

写真24　水を濾過し流す水路

事例３　花を摘むことをどう考えるか

庭には様々な花が咲いたが、子どもも保護者も学生もその花を摘むことを躊躇った（写真25）。そこで「庭の花は摘んではいけないのか」話し合いを持った。なぜ花の種を植えたのか、何を味わって欲しいのか、一つ一つ丁寧に考えた。種を撒いた場所を花壇として囲うのか囲わないのか議論する中で、その囲いにも保育者の意識が表れてくることを感じていった。

写真25　花を摘む親子

事例４　水場をどう考えるか

庭には水道がない。夏には大きなたらいに水を汲んで、庭の中央に置いた。長いホースを延ばして置くこともあった。その際、濡れても良い気候か、着替えはどうするのか、水の大切さは知らせるべきなのか等、保育者は様々な点で考えることが必要であることに学生は気付いていった。秋にはタンクを置くことにした（写真26）。水の勢いは弱く、資源には限りがあることも視覚的によくわかる。また、井戸を掘るアイディアも出た。

写真26　水のタンク

事例５　築山での出来事を通して、子どもの育ちをどう考えるか

築山には４メートルほどの板が立て掛けてある（写真27）。この板を登ること、降りることに挑戦し始める子どももいる。ある一場面をビデオカメラで撮影し授業内で検討した。あらためて見てみると、子どもが順番を抜かされたときに何も言っていないが何かを感じている表情や次の人が来たときにさっと身を避けている様子など、その場では気付かずに見過ごしてしまっていることに多くの学生が気付いた。保育者が目と心を留めなければならない小さな大切なことに気付き、子どもに寄り添い何を育てるのか考えあった。

写真27　築山に掛けた板

事例５　メダカを飼う中で起きたことにどう対処するか

メダカを飼うことによって、夏の暑さからどう守るか、冬に氷が張ったらどう冬を越させるか、カラスがやってきた、ヤゴがいた等、何かが起きる度に学生が調べ、話し合い、実践してみた。それを越える度にメダカへの愛情が深まっていくことを体験した（写真28・29）。

写真28　メダカを室内用の水槽に移す

写真29　メダカを庭に移す

事例６　野菜作り・庭での遊びをどう考えるか

夏休みの間も気温35度を超える猛暑の中、庭プロジェクトの学生たちは畑の世話を続けてきた。初心者にも関わらず、ナスもミニトマトも多くの実をつけていた。この日はある子育て支援サークルがこの庭で遊んでいた。一人の小学生が畑の野菜に興味を示した場面に居合わせた庭プロジェクトの学生が次のように記録している。

> 小学生は、トマトを採って「うわ、虫食っているこれ」と言ってポイっと捨てた。私はとても悲しかった。まだ赤くなりきっていなくても色がつき始めたトマトを次から次に採ろうとする様子は、間引きの意味が分からずに次々人参を抜いてしまった２・３歳児とあまり変わらないと思った。私はただ付き添って見ているしかできず、他のメンバーが小学生に話しかけながら進めていたが、私は小学生のこの行動一つ一つにネガティブな視点でしか見られなくなっている自分に気づいた。
>
> 畑以外でも、子どもたちの庭の使い方は予想を上回るものがあった。築山の近くでは絵の具を溶いた色水を地面に流し、ようやく咲いた花の周りに緑色の大きな水たまりができていたり、庭を囲っている土の塀を登ってわざと崩したりしていた。子どもたちが何をしても、先生も保護者も何も言わなかった。子どもたちには「何をしても許される場所」という考えが定着しているように感じた。「自由保育」「自己発揮」とは何かを考えさせられた。私は庭の使い方として自由の制限はしたくないが、このままでは子どもにとっても良くないと思った。

この日の出来事を体験した学生を中心に、庭プロジェクトミーティングは何度も開かれた。野菜を収穫した小学生に何を感じて欲しいのか、今後この子どもを中心に展開するならば、どのような関わりをしていくか検討し実践した。しかし、実際は対象児の発見や提案よりも周囲の大人同士で決めて進め、その後の野菜の世話は学生がするからいいという考えがあることを知って学生は驚き、「野菜栽培をしてきた意味」について、メンバーで何度も話し合った。さらに学生を含む子どもの周囲の大人同士で思いを共有する難しさを痛感した。また「採ってよいものと採ってはいけないものを決めるのはおかしい」「自由に採ってもらいたいが大切にする気持ちも持ってほしい」という矛盾する気持ちを抱き、どう判断したらよいか悩む中で学生は「どのような体験から何を育てるか」を場面に応じて理解していった。

この事例では野菜や草花も生きているという感覚や慈しむという感覚が未発達な子どもがいることを実践により知り、乳幼児期から植物に触れ、遊び（残酷な体験も含む）、育てる経験に乏しい現実も学生は知った。庭プロジェクトメンバーは、この庭で自由に遊んでほしいという思いが根底にあったが、「自由」とは何か、「自由」とは何をしても良いということではないことと、そこに大人がいる意味についても考えるよい機会となった。

庭に畑が出来たことで、猫が糞をした・虫が苗を食べてしまった・水をあげないと枯れてしまう等、野菜を育てる上で必要なことが次々と起き、子どもや学生が育つ教材を提供してくれることとなった。

５）庭プロジェクトメンバーのアンケート調査と結果

2020年８月に歴代の庭プロジェクトメンバーにアンケート調査を行った。質問事項は、前稿で掲げた「学生にとっての豊かな環境」の５つのポイントとした。調査方法は、書面で依頼し、web（Forms）で回答を受けた。24名に依頼し12名から回答を得ることができた。

①　子どもとの出会いや体験にわくわくしたか

５段階評価の平均は、3.9であった。高い評価をつけた学生（卒業生）の理由は、子どもが思い切りはじけて遊ぶ姿を見ることができて今日はどのようになるのかとわくわくした・子どもによって様々な視点がありその子に応じたかかわりをして遊びを深める先生方の姿はとても勉強になった等だった。一方、低い評価をつけた理由は、実際に子どもが遊ぶ姿を見ていない2019年卒業生とコロナ禍で活動できなかった時期の在学生であった。

②　見たこと、体験したことの意味を探りたくなったか

５段階評価の平均は、４であった。高い評価をつけた学生（卒業生）の理由は、学生ならではの面白くて自由な考えが出て本当に子どものための良い環境とは何かを考えさせられた・子どもが興味を持ったことや遊ぶ姿を見てその理由を探りたくなった等、「子どもにとって」という視点を持った学生は、探究意欲が高まったことが分かる。一方、楽しいと感じるだけで終わったという学生も１名いた。

③　気兼ねなく自分らしく振舞えたか

５段階評価の平均は、3.7であった。高い評価をつけた学生（卒業生）の理由は、何をするにも居心地が良かった・みんなが自分の考えを話しそれを共有する中で自分のありのままを出せるようになった・少人数だったため自分の考えを言うことができた等、安心感や受容感、適切な規模（人数）が大切なことが分かる。一方、低い評価をつけた理由は、ミーティングに参加する機会が少なく慣れる前に終わってしまった・まだ先輩と話をするのに緊張してしまうので集まる回数を重ねていきたいという回答もあった。このことから、ミーティングや活動を行う頻度によって差がみられることが分かった。

④　自分の考えを素直に表現できたか

５段階評価の平均は、3.6であった。その理由は⑤と共通するものが多かったが、その他、間違いはないと思える雰囲気だった・思い切り自分の思いをぶつけてみんなの思いも受け止めて試行錯誤しながらもみんなに支えられて活動することができたとの回答があった一方で、話しやすい場と話しづらい場があったという回答もあった。この点については、ファシリテーターとして進行した筆者に課題があったと自覚している。また、１年次は自分の考えを言えなかったが２年次にはそれが解消された点からは、活動全体を把握し主体者として考えられるようになるまではある程度の時間が必要であることも分かった。

⑤　現在（将来）の仕事に生かされていると感じることはあるか

５段階評価の平均は、3.8であった。その理由として、より子どもと自然が一体となったような遊び方が素敵だと思うようになった・庭づくりを通して学ぶことがなかったら子どもの気付きや遊びの中での学びを尊重して見守ることはできなかった等、自然体験の意味や子どもの経験から学びを見つめる視点が確実に育っていることが分かった。

さらに広義的な意味では、自分の考えを伝える力・何かを作り上げることへの達成感を感じる喜び・子どもが喜ぶ姿を想像することが何かをすることへの原動力になること等があげられる。在校生に関しては、期待値が高かった。

庭プロジェクトに参加しようと思った理由として、一から考えられることに魅力を感じたという回答が50%であった。その他、子どもの視点で考えたいと思った･先輩の活動の経過を知り興味を持ったという理由があった。学生も、プロジェクト型の取り組みでは能動的に自分のアイディアや思いを表現し、意欲を燃やして主体的に取り組もうとすることが分かる。また、庭プロジェクトでの経験で印象に残っている経験を問うと、回答した12名がそれぞれ違う経験をあげた。砂場の砂をとことんこだわって選んだこと・手作り味噌汁を飲みながら庭について話し合った時間・メダカの卵が孵化したこと・一つに絞ることは難しいほどどの場所にも学生と先生の思いが詰まっていると回答した学生（卒業生）もおり、どの活動にも思い入れがあることが分かる。

最後に、この活動が深く濃く楽しい時間だったのでこれからも続いてほしいと願う卒業生の記述があった。学生にとって、主体的に取り組め多くを学んだプロジェクトであったことを報告する。

６）庭プロジェクトの考察

本学「親と子のひろば」に庭ができたことで､学生のみならず親子の自然体験の機会が大いに増えることとなった。庭での体験は､「収穫した野菜で料理をして味わう」や「草花で遊ぶことでその特徴を知る」といった単純な捉えではなく、もっと深い学びがあることを筆者も実践者の一人として実感してきた。杉村ら（2009）は、自然体験は様々な科学的な学びの可能性だけで組織化されているわけではなく、特に幼児教育においては内面の育ちを促すことを基本としている保育者の捉えがあることを強調している[6)]。さらに笠原ら（2016）は、複数の保育施設において実践者がどのような視点で自然体験を捉え行っているか調査し、その中には「自然体験は、統制不可能な自然との間に応答的な調整による自己認識が生成していること、自然との応答的な相互作用のより内発的な自己感を形成するもの」という視点を見出している。そして、ここには実践者の子ども観・自然観・願い（信念）が含み込まれ、子どもとともにそれを実践者も体験するという形で保育が行われていると指摘している。また､｢協同実践者｣として体験する中で、多感覚的な統合を間主観的に子どもたちの言葉や表情や行動から捉えることができると説明している[7)]。この点から考察すると、庭プロジェクトメンバーを中心に、庭で子どもと一緒に体験した出来事から学生が学びとり議論した内容は､自然体験から子どもに何が育つかという視点で子どもの姿から深く見取ることができたと捉えることができる。この育ちとは、自然体験ならではの科学的思考とともに、それぞれの子どもの特徴に合わせた一人一人の内面の育ち（心情･意欲･態度）を指す。そして、学生のみならず、その場で子どもとともに体験を共有した保護者と教員も「協同実践者」として子どもの学びと育ちを支える目を育んだという結果につながっている。

４.「親と子のひろば」参加者へのアンケート調査と結果

これまで、「親と子のひろば」の３年間の取り組みを概観し、その中から特に学生と協同で取り組んだ庭プロジェクトを中心に述べてきた。「親と子のひろば」に参加している保護者は、これまでの取り組みをどのように感じているのか調査するため、2020年12月、「親と子のひろば」に参加している18組の親子にアンケートを依頼し、14組の親子から回答を得た。質問事項は、前稿で掲げた「子どもにとっての豊かな環境」と「保護者にとっての豊かな環境」の５つのポイントとした。対象は庭に限らず保育室も含めた全体について質問し、それぞれ５段階評価とした。その具体的内容については任意での記述式とした。回答方法は、質問用紙への記述またはweb（Forms）を各自選択とした。その結果、次の表１・２のような回答を得た。

表１　子どもに関する項目の質問事項と回答

質問事項	評価の平均	具体的記述　（▲改善点）（下線は、庭に関する内容）
①子どもの興味･関心･探索意欲をそそる環境か	4.9	○庭が出来て、砂遊びを喜んでいる。 ○裸足で遊べて、青空の下、楽しそうだ。 ○小さいうちは保育室の中でいろいろなおもちゃや大きいお兄さんお姉さんから刺激がもらえる。大きくなってからは外で自然や砂遊びが出来て良かった。 ○友達が遊んでいるおもちゃに興味をもって自分から試行錯誤して遊んでいた。 ○パズルやレールなど作ってる大きい子の方に興味津々で行き、大きい子の遊びを邪魔してしまうため申し訳ないけど、ちびっ子にはいい経験。大きい子もではどうするかと考えるきっかけにもなったりで、今の環境で満足している。
②見立て遊びが出来る素材が豊かな環境か	4.8	○家にまだおままごとセットや看護師さんセットが無いときに、こちらではいつもそれを使って遊ぶので、興味があるものを知ることができた。
③子どもの欲求が満たされる十分な数の遊具がある環境か	4.6	○玩具がたくさん揃っていて、コーナーごとに遊べるスペースが分かれているので、子どもが好きな遊びを自由に選び、集中して遊べる環境が整っている。 ○いろいろなおもちゃがあって、先生たちも話しかけてくれるので、子どもにとってはとても良い。
④静と動の遊びが保障され五感で感じられる環境か	4.8	○外遊び（砂場）と室内遊び（ごっこ遊びやすべり台、お絵かき等）のどちらも自由にできる環境がある。 ○味噌づくりやトマト摘みなど、他ではなかなか体験できないことが多い。 ○季節ごとに、お味噌を作ったり、学生さんと簡単なおやつを作れる。遊んでコミュニケーション取るだけではなかったのが良かった。 ○今年度は下の子と参加しているが、動きが活発になってきて外で砂遊びや水遊びや落ち葉遊びをして楽しんでいる姿が見ることができ親としても嬉しい。 ○家がマンションなので庭がなく、こちらへ来ると畑などが身近にあるので、大変興味深く感じている。まだやっと歩き始めたところなので、これからが楽しみだ。 ○砂場で泥遊び。 ▲鉄棒があったら嬉しい。 ▲コロナの影響で、お菓子つくりなどイベントが少なくなったのが残念だ。 ▲今年度は、コロナということもあり、去年のようなみんなで何かを作ったり食べたりというのができなくなり少し残念だ。
⑤安全で衛生的な環境か	4.9	○ホットカーペットもとてもいい。 ○トイレも綺麗。 ▲手洗い場が部屋の一番奥にあるので汚れが酷いときは部屋が汚れないように奥まで連れて行くのが少し大変だった。 ○▲おもちゃを口に入れる時期には、自由に動き回りたい子にとっておままごとコーナーは小さなおもちゃがあるため少し目が離せない場所になる。でも、私が気付けない時は誰か他の方が気付いて教えていただけてありがたかった。 ▲床のマットが絨毯であったり、ジョイントマットになっていて、その隙間でつまづきやすい。 ▲外でもお湯が使えると良い。
その他	○学生のお姉さんたちと遊ぶのも満足している。お姉さんが一生懸命関わってくださり反応してくれるので、子どもは母を離れて遊ぶようになった。 ○先生や学生さんたちとの触れ合いも子どもたちはとても嬉しそうだった。 ○お姉さんたちもやさしくて自分のやりたい事の手伝いをしてくれるので色々なことを覚えて良かった。 ○年齢を越えて友達と遊べる。 ○友達と一緒に過ごす楽しさを知って友達が好きになれた。 ○家族以外の人と触れ合うことが出来る。 ○小さいうちから身内以外の接点が持てて生まれてから一度も人見知りせず誰にでもニコニコしている。一人で遊ぶ時間が増えた。本人も他のお子さんと接して楽しそうにしている。 ○先生や学生さんも子どもと関わってくれるのが、子どもにとって新しい影響になった。 ▲学生さんがいる時は、遊んでもらって有り難いので、いつの日が学生さんが入る日なのかなど事前に知れたら嬉しい。 ○今年度はコロナの影響でなかなか室内で他の子と遊ぶ場所がない中で、予約の仕方を含めて過ごしやすかった。	

表２　保護者に関する項目の質問と回答

質問事項	評価の平均	具体的記述　（▲改善点）（下線は、庭に関する内容）
①リラックスして休める環境か	4.4	○子どもを見てくれる人が多いので、ちょっと目を離して一息つくことができる。 ○学生さんたちが広場に入っていただいていると他のお母さんたちとゆっくり過ごせるのでとても良かった。 ○他の保護者の方とも話しやすく、リラックスして過ごすことができます。 ○アットホームな雰囲気で先生方が優しく親身になって子育ての悩みや相談にのってくださり、心の充電をすることができた。 ○お茶の用意がありがたい。 ○一人目の子育てで不安でいっぱいだったが温かく迎えていただき本当にありがたい場所だ。
②人とのコミュニケーションが取りやすい環境か	4.6	○他の保護者の方や先生、学生さんとお話しできる機会がありよかった。 ○広場以外の場でも地域で会った時もみなさんあいさつして時々おしゃべりもできて、知り合いが増えたのも良かった。気さくに話ができる環境だからこそと思う。自分は人見知りなので本当良かった。 ○他のお母さんやスタッフの皆さんとコミュニケーションがとれる。 ▲仲良しお母さん同士の輪に入りづらくて最初の頃は気まずい時もあったけれど、スタッフさんが話しかけてくれてありがたかった。
③他の子どもの姿を見てかかわりたくなる環境か	4.6	○子どもが自分のところから少しでも離れて他の人と遊ぶことが出来るようになった。
④心を開放しスタッフや他の保護者と話したくなる環境か	4.6	○専門家の方の相談も良かった。 ○いつも安心して来れるのでとても良いところだ。 ○学生さんや先生が子どもと遊んでいる間、他のお母さんたちと話をすることが出来て気分転換になった。 ○悩んだときに先生に相談し、アドバイスをもらうことが出来た。 ○コロナ禍でも人と話したり、子育てについて誰にでも気軽に相談できる。
⑤家庭でも出来ること、家庭では出来ないことが経験できる環境か	4.7	○今はコロナ禍で難しいが、味噌を作ったり、時々美味しいものをいただいたりしたのは嬉しかった。そういう時に遊んでいるだけでは見えない他のおうちの子育てのやり方がちらっと垣間見えて面白かった。こうやって食事させてるんだ、しつけとか。 ○味噌作りを体験してみて、家で自分も子どもと作ってみるきっかけになった。 ○家ではできない体験ができた。 ▲来年もコロナ禍かもしれないが、なにかイベントごとがあれば嬉しい。
その他	○今年は畑もしていたので、庭が賑やかになって楽しみが増えた。 ○コロナ禍では、毎日窮屈な感じがするが、広場が再開して嬉しかった。 ○コロナの感染者が増える中不安もあるが、続けてほしい。 ○先生たちにお会いできるのも励みになっている。 ○いつもプラスな言葉をかけていただく。 ○ストレス発散ができた。 ○支援センターはだいたい先生と保護者だけの環境だが、学生さんが入ることでいろんな年代の方と子どもが遊ぶことが出来ることが良かった。 ○先生が子どもと接するときの対応を見て、子どもの自主性を大切に接してくださると感じた。私は子育て経験がなく、分からないことだらけなので、接し方を見ていて大変勉強になる。	

アンケート調査の結果から、どの項目もおおむね高い評価を得たが、具体的記述を①から⑤の項目で分類した際にどこにも属さない内容をその他としてまとめた。すると、「人とのかかわり」に関する記述が多いことが分かった。コロナ禍という状況下にあることもその要因の一つと考えられるが、家族以外の人と触れ合うことが子どもにとっても保護者にとっても求められていること、そして子どもが人とのかかわりの中で育っていくことを保護者として実感していることや自らの学びになっていることが顕著に表れた。

５．まとめと今後の課題

本稿では、３年間の取り組みを概観し、その中から特に学生と協同で取り組んだ庭プロジェクトを中心に報告した。庭プロジェクトの取り組みの事例からは、学生に様々な探究心が生れ、活動や議論することでより学びが深まっていったことが分かった。庭プロジェクトメンバーの学生（卒業生）アンケートでは、自然体験による科学的思考に限らず、保育者として何事に取り組む際にも生かされる経験であると感じていた学生もいた。また、保護者アンケートでは、庭での遊びに限らず、子育て支援広場「親と子のひろば」全体について、前稿で掲げた「豊かな環境の５つのポイント」について評価していった。その結果、庭についての記載が多くあり、自然体験がもたらしてくれる経験の豊かさを保護者として実感していることが分かった。もう一つの大きな特徴として、学生やスタッフとのかかわりについて多くの記載があった。どんなに豊かな自然が目の前にあっても、そこに人と人とのかかわりがなければ、豊かな学びと育ちは実感されない。人は人の中で育つものである。そのためにも、豊かな物的環境とともに多様な世代の人が集える場といつでも集える時間と雰囲気、そして、真摯に子どもの育ちを考え議論できる機会が必要である[8)]。

本稿は、庭づくりの機会を学生の学びの機会と捉え立ち上げたプロジェクトの報告である。庭プロジェクトが学生組織となり、これからも「子どものため」「保護者のため」そして、自分たちの経験から得る学びのために自然とともに活動を継続してくれることだろう。今後、我々教員は、学生のその姿を信頼し、任せ、見守り、学生の学びを深める視点を頭に置きながら支えていくのが役割となる。「親と子のひろば」という実践の場で、この学生の学びをどのように捉え、どう支えていくのかが今後の大きな課題となる。

謝　辞

最後に、庭プロジェクトメンバーとして共に学び生き生きと活動してくれた学生（卒業生）の皆さんを紹介したい。そして、苦労も感動も共にした庭プロジェクトの仲間と陰ながら協力してくれた同僚に心より感謝の意を表する。

＜庭プロジェクトメンバー＞　（敬称略）

2019年３月　卒業　　岡崎実里・菅野あすか・阿部穂乃香

2020年３月　卒業　　大内郁華・尾形彩珠紗・佐藤綾音・鈴木亜美・高橋日向・髙橋穂澄・長尾茉奈・野地美月・平川慶・皆川真夕貴・武藤茉未・渡邉ひなこ

2020年３月２年生　　大内美羽・小笠原奈々・勝山里紗・菅野栞・宍戸菜々・古内朋香

2020年３月１年生　　上泉怜奈・本田理紗・松本ひな・村松莉奈

文　献

１）奥田美由紀・長谷川美香（2017）「学生の学びをより深めるための保育実践の向上を目指して　第１報――子育て支援広場の環境づくりの実践と課題――」桜の聖母短期大学紀要　第41号　p.1-35

２）秋田喜代美・石田佳織・辻谷真知子・宮田まり子・宮本雄太（2019）『園庭を豊かな育ちの場に』ひかりのくに

３）木村歩美・井上寿（2018）『子どもが自ら育つ園庭整備――挑戦も安心も大切にする保育へ』ひとなる書房

４）小泉昭男（2011）『自然と遊ぼう　園庭大改造』ひとなる書房

５）宮里暁美（2018）『０－５歳児　子どもの「やりたい！」が発揮される保育環境』学研

６）杉村伸一郎・岡花祈一郎・浅川淳司・財満由美子・松本信吾・林よし恵・上松由美子・落合さゆり（2009）「自然体験を通した幼児の『育ち』と『学び』に関する検討　広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要　第37号　p.239-246

７）笠原広一・山本一成・板倉真衣（2016）「幼児教育実践者へのインタビューに基づく体験理解の視点の考察――幼児の自然体験の意味をめぐって――」福岡教育大学紀要 第65号 第４分冊　p.61-72
８）子育て支援者コンピテンシー研究会編著（2009）『育つ・つながる　子育て支援』チャイルド本社